

## 現代詩論考に歴史認識と思索力を与える人

芳賀章内詩論集『詩的言語の現在』に寄せて

鈴木比佐雄

1

芳賀章内さんの本書の原稿を読みながら、私は北川冬彦という詩人が昭和初期に日本の現代詩を創り出した類まれな詩人・詩運動家であり、現代詩に与えた影響の深さと広がりをも再認識させられた。また北川冬彦の構想し実践した「新現実主義（ネオ・リアリズム）」を含めた詩論の課題に対して、芳賀さんが詩誌「鮫」で論考してきた文体の魅力に心惹かれてしまった。芳賀さんの詩論には、思索することの生々しい格闘や痕跡が伝わってきて、早急に結論に向かうのではなく、じっくり他者の思考や困難な現在の課題を浮き彫りにしながら、その問いを自己の内部で対話（ダイアログ）させる粘り強いリアリズムの精神が存在すると感じた。

私は一九九〇年に嵯峨信之さんの「詩学」の依頼で詩誌月評を担当していて、毎月全国の詩誌を読み続けていた。その中に詩誌「時間」があった。北川冬彦が亡くなったことを告げていた終刊号であり追悼号であったと記憶している。昭和初期の「詩と詩論」や「詩・現実」を創刊した詩

人の訃報を知り、その「時間」という名前に込めた北川冬彦という詩人の詩作や詩論をいつか探りたいと願っていた。

例えば金子光晴の評論「現代詩と詩人の立場」を読むと、北川冬彦の詩と詩論の評価は「今までの詩とその方法に頼らないで、現実との新しいつながりを究明してきた」と小野十三郎や草野心平などと共に最高級の評価を与えられていて、北川の人物描写も真実が描かれているように感じられた。ところが戦後に出てきた鮎川信夫、吉本隆明、大岡信たちの評価は、全く逆で過去の遺物のようなモダニズム詩の中心人物のように記されていた。しかし私はその三人の批評家たちの視線が、北川冬彦という詩人の詩や詩論に対して眼を背けているところが感じられ、その否定の根拠も恣意的な思いがしていた。どこか鮎川たちは無意識に北川冬彦や春山行夫などの現代詩の「父殺し」をしているようにも感じられた。なぜなら彼らの文体はある種の若書きのような性急さを抱えた単一的な思考の文体であり、金子光晴の人物を見つめる魅力的な文体や北川冬彦の昭和四年に刊行された詩集『戦争』などの時代に抵抗していく文体を思い浮かべれば、格段の差があると確かに感じていたからだ。鮎川たちが「詩と詩論」から「詩・現実」がなぜ分離したのかと、北川冬彦と春山行夫の根本的な詩論の違いを検証しなかったことは、彼らの詩論の貧

しさになっていくように私には考えられる。今回の解説文を書くために「詩と詩論」十四冊・「詩・現実」五冊・「文学」（「詩と詩論」の誌名変更）六冊を拾い読みしてみたが、各巻とも三〇〇頁前後もあり、詩篇、詩論、評論、翻訳などその内容の豊かさに驚いてしまった。私は北川冬彦・春山行夫が昭和初期の若手の詩人だけでなく、横光利一、堀辰雄、梶井基次郎、阿部知二などの小説家や、神原泰、飯島正などの美術家や映画評論家、渡辺一夫、中島健蔵などの学者たちなど（プロレタリア詩人を除く）オールジャパンのような人選を目指したように思えた。この二人の詩人の志に敬意を抱いていたことは横光利一の文章などを読めば明らかだ。その意味で実作者でありながら同時代の一流の作家・学者・芸術家たちを引き寄せた二人の編集能力の高さには脱帽してしまつた。また海外の文学者の数多くの紹介は日中戦争やソ連や米国との戦争に邁進するために、海外からの情報を遮断させようとしていた日本政府・軍部への参加者達の抵抗精神でもあったと私には強く感じられた。その意味でも「詩と詩論」「詩・現実」などの昭和初期の詩運動とそれを引き継ごうとした戦後の詩運動がこれから正當に評価されることを願って、芳賀さんはきっと本詩論集をまとめられたのだろう。

それから十年後の二〇〇〇年五月中旬に、私は詩誌

「鮫」を主宰する芳賀章内さんに初めて電話をすることになった。その際には敬愛する詩人の深刻な事実を伝えなければならぬので心が重たかった。「鮫」の同人である鳴海英吉さんが、その年の初めに体調を崩して、三月ぐらいには、言葉に変調をきたし始めた。心配で五月の連休中に様子を見に行くと、寝込んでいたが起き上がり話そうとしたが、あの江戸弁の歯切れのいい言葉が聞き取りにくくなっていった。席を外して奥様に病状を尋ねると医師からは、肺癌が進行し脳に転移してしまい、その影響で言葉が自由になつたとのことで、休み明けには緊急入院することになった。入院後にすぐにお見舞いに行つたが、病状はより進行していることも告げられた。鳴海さんは自分の病状を関係する詩人たちには話さなくてもいいとも語つたが、当時鳴海さんが所属している詩誌「鮫」、「炎樹」、「光芒」の主宰者や関わりの深い詩友には知らすべきだと思い、まず初めに芳賀さんに電話をかけた。すると芳賀さんは鳴海さんの体調を前から心配していたようで、私が週末ごとにお見舞いに行くことを知り、同行したいと即座に言われた。鳴海さんが入院された成田の赤十字病院は、芳賀さんの住むさいたま市からは遠いので、私が暮らす柏市まで来てもらい私の車で向かうことにした。当時の芳賀さんは長年勤められていた雄山閣を定年退職したころだった。私には雄

山閣が「季刊考古学」を出している歴史書専門の出版社の一つであることぐらいの認識だったが、車の中で当時すでに九十年もの歴史のある出版社で歴史・考古学では、その分野の一流の学者達を網羅して様々な講座シリーズの研究書などを刊行し続けて、専門分野を切り拓いてきたことを知り驚かされた。芳賀さんは早稲田大学の学生の頃から北川冬彦の詩誌「時間」に参加し、その編集実務を五、六年務として第一線で活躍されてきたことを知った。芳賀さんの頭脳には、全国の歴史・考古学・民俗学・日本思想史の学者たちの研究テーマ、研究実績、その進行状況やそれらの学者達の人物像がそっくり入っているように感じられた。また歴史だけでなく、現代社会、経済、思想・哲学に至るまでの知識が、深く思索された論文のような言葉となつて語られてくるのだった。往復三時間ほどの車での時間は、密度の濃い歴史・文化・社会・思想などの講座を聞いている思いがしたものだ。もちろん今回の詩論集に収録されている「鮫」に書き継いでいた「鮫の座」の魅力的な文体の論考も欠かさず読んでいたが、そんな論客から初対面でじっくり話を聞けることは嬉しいことだった。鳴海さんへのお見舞いは成田赤十字病院だけでなく、その後に転院した白井の南ヶ丘病院も一緒にお見舞いに行つた。一度目

井まで車で向かった。編集会議では戦前から詩誌に参加していた鳴海さんの年譜作りには、発表詩誌や書斎の詩作ノート類など膨大な資料を調査し記録することが必要であり、芳賀さんたち三人は私にその作業を一任してくれた。芳賀さんと佐藤さんは出版社を経営していた実務者であり、大掛さんも詩誌「光芒」の編集実務を長年経験していたこともあり、頻繁に基礎資料を調査し分析できる実務者が編集をすべきだという判断をしてくれた。私は三人からいつも励まされてその全詩集刊行の仕事をやり遂げることが出来たのだ。そして芳賀さんからは出版社経営者として冷静で論理的な判断力と関係者の力を結集して徹底して専門的な書籍を作り上げるという出版人の誇りを学んだと思う。芳賀章内さんの評論を読むと、学生時代に出会った新現実主義（ネオ・リアリズム）を提唱し実践した北川冬彦の詩誌「時間」の精神を継承する詩論家と、歴史・考古学研究などの歴史的時空間を通して現代社会を照射し考察する編集者が共存していることが分かる。そして芳賀さんという一人の人間の中で、その二人が対話（ダイアログ）しているような思いがしてくる。芳賀さんの歴史・文化・言語の対話（ダイアログ）の内容を紹介してみたい。

のお見舞いは、少しのコミュニケーションは可能だったが、二度目のお見舞いは、寝たきり状態になり、全く言葉を発することは出来なかった。けれども少しベッドの角度は上げられていて、鳴海さんの眼光は鋭く光つており、私たち二人を見かけると認識していることが分かり、詩友にあった喜びを表情で伝えてくれた。この二度の訪問で芳賀さんが鳴海さんをいかに敬愛しているかがよく分かった。鳴海さんと芳賀さんの二人の無言の対話は、古武士たちの別れのような思いがした。私はその時の鳴海さんの友愛に満ちた眼光と芳賀さんの敬愛の念と優しい言葉掛けを決して忘れることが出来ない。その年の八月三十一日に鳴海さんは帰らぬ人となった。

鳴海さんのお通夜と告別式が終わった後に、私は『鳴海英吉全詩集』を刊行することを提案し鳴海さんの奥様のお許しを得た。この全詩集をまとめるに当たって、鳴海さんが同人だった「鮫」の芳賀章内さん、「炎樹」の佐藤文夫さん、「光芒」の大掛史子さんにまず相談をした。そして三人には全詩集刊行会を作り、私を含め四人が中心となつて二年後の二〇〇二年八月三十一日の命日を目途に刊行することを計画した。そして何回か鳴海さんの自宅で編集会議を開き実現に向かっていった。その編集会議の際にも私と芳賀さんは柏駅で待ち合わせて鳴海さんの暮らした酒々

2

詩論集の編集構成は、I章「詩論」、II章「詩人論・追悼文・書評」、III章「論考・エッセイ」、IV章「鮫の座」論考」からなっている。全体を通読してまず感じられることは、戦前戦後の歴史的なモダニズム詩運動を文献学的手法で論じたものではなく、それら詩運動の当事者達からの生々しい交流が原点となっていることだ。この詩論集では、昭和三年の日本にモダニズム詩を本格的に紹介し実践した「詩と詩論」や昭和五年の「詩・現実」などの詩誌を刊行しその中心的存在であり、戦後には昭和二十五年に「時間」を刊行し、「荒地」や「列島」の詩運動がそのすぐ後に顕在化する以前に、モダニズム詩とプロレタリア詩の課題やその限界を根本的に考察し止揚させようとしていた北川冬彦の詩論と実践を明らかにしようとして試みている。また北川冬彦の詩運動の構想力とその実践を近くから見たものだけが記すことができる北川冬彦の実践的な詩作の先見性を正當に評価しようと考えている。さらに北川冬彦の詩論を受け止め、それを思想的に対話することが、きつと芳賀さんの詩と詩論を生み出す詩的情熱の根源であるように思われる。そうであるからと言って北川冬彦をある意味で客体化しきれないということだけでなく、芳賀さんは限りなく北川冬彦の詩的業績を客体化するからこそ、その

正当な評価をこの詩論集で論じようとしている。北川冬彦の名が急速に消えていったいわゆる一九五九年の「H氏賞事件」について芳賀さんはその事件があったからと言って北川冬彦の詩的評価は何ら変えることはないと言っている。冒頭の「新現実主義」という現実・メモ——敗戦後の自覚的存在を担う詩誌『時間』の十年」が書かれた経緯は、同じ「時間」同人だった黒羽英二さんから依頼があり「新現代詩」二号（二〇〇七年）に掲載されたものだ。黒羽さんも北川冬彦が「時間」を創刊した当時を知る関係者だから、北川冬彦の「新現実主義（ネオ・リアリズム）」を語るには、北川冬彦の詩的精神を継承している芳賀さんが相応しいという判断だったのである。

この評論の中で芳賀さんは北川冬彦の思考し実践した詩論の中心テーマを明らかにする。現代詩の源流にはモダニズム詩の流れの「詩と詩論」とプロレタリア詩の流れの「赤と黒」がある。その「二大潮流を綜合しよう」と云うのがネオ・リアリズム詩運動なのである。だから、ネオ・リアリズム詩運動は一流派の運動ではない」という北川冬彦の詩論を実現するために詩誌「時間」は創刊された。「あたらしい現実主義の詩は、内在的な映像で、世界を意識的に構築する。それは映像を描くのではない。あたらしい現実主義の詩は外部と内部との関係性の上に立つて、その批

評的内容と思想とを、映像で構築する」という北川冬彦が提唱する詩論に、「時間」の同人たちは共感し合い詩の運動を開始した。そんな詩論を実践した詩人である殿内芳樹、桜井勝美、木暮克彦、澤村光博、藤一也などの実作について芳賀さんはその特長を解説している。また新現実主義（ネオ・リアリズム）が「ミイット論（内的神話、現代神話）」を取り込んでイマーシユ方法論として発展・展開していくことも記している。

「北川冬彦のリアリズム」では、一九九六年に和田博文・澤正宏の両氏が編集し刊行した『都市モダニズムの奔流「誌と詩論」のレスプリヌーボー』（三十四名の研究者の学究的論考）を紹介することから始まっている。和田氏は「現代詩Ⅱ戦後詩であるかのような言説は、長らくモダニズムの言語実験を隠蔽してきた。だから『詩と詩論』を問う本書は、モダニズムを問う長い道程の一里塚に過ぎない」という。それを受けて芳賀さんは「モダニズムの本質は、光と影が同時に見えるところにある。モダニズムは正と負が同居し、同時に見える地点にある——という高度な近代資本主義の構造を背負っているのだ。（中略）そのような文化総体としてのモダニズムと、それにかかわる言語、詩語の在り様を探ることこそ課題なのだ。敗戦に度胆を抜かれやたらに伝統を否定してみせた敗戦後の一時

期は、敗戦後生まれの研究者によって冷静に修正されるという意味で、本書の果たす役割は大きいように思われる。しかもまだまだ、戦前と戦後を、連続性のなか捉えるにはさまざまな視角が必要である」と語っている。つまり芳賀さんの詩論には、戦後詩の詩的言語を考察する上で、戦前の言語思想や言語実験を検証することもなく、戦前の現代詩の言語実験の試みを否定する戦後詩の独自性を強調してきた詩人・詩論家たちに対して、事実認識の根本的な問題点を指摘している。本詩論集の根底には、そんな「戦前と戦後を、連続性のなか捉える多様な視点」を自らに課して、事実認識に基づいて詩的言語を論考する誠実さが感じとれるのだ。芳賀さんは「北川は『北川冬彦—第二次「時間』の詩人達』を著した藤一也が記したように、珍しいほ

いたのだろう。そんな芳賀さんは、北川冬彦が試みた四つの詩運動を通して、戦前と戦後をつなぐ詩的言語の実験的な歴史を明らかにしていく。そして先ほど引用した藤一也の著書、桜井勝美の著書『北川冬彦の世界』、各種文学事典や北川冬彦自らの言葉などで語らせている。

一つ目は、明治大正の抒情詩、象徴詩、民衆詩の限界を感じて、一九二四年に大連で安西冬衛と出会い「亜」を創刊し、東京でも「面」を発行し「短詩運動」詩作と詩論を担い、行わけ自由詩の散漫さを厳しく詩人の内面に問い、詩史に残る詩活動をした。

どにマニフェストを掲げる性格の強さがあった。それは常に現実立ち、その現実から未来を望むときに心底に揺れるカオスの発言ともいえた」という。この芳賀さんの北川冬彦への評言は、「一九五二年から一九五七年まで北川の主宰する『時間』に関係していたので、氏の性格は私なりに理解していた」という発言に裏付けられるのだ。芳賀さんは学生時代から北川冬彦と日常的に接して「時間」の編集実務を手伝い、将来の編集者としての基礎を学んでいたのだろう。その意味で北川冬彦の光と影の両面を体験して

二つ目は、一九二八年に現代詩の出発点ともなった春山行夫たち十一名と始めた「詩と詩論」での「散文詩運動」であり、その後に「春山行夫の無内容なフォルマリズムや現実遊離のシュウルレアリスムが強調されるに及んで」、神原泰、三好達治、丸山薫、飯島正たちと一九三〇年に創刊した「詩・現実」で「新しい現実感の創造を目的とした」という。あたらしい現実主義を北川冬彦は「新現実主義（ネオリアリズム）」として構想した。同年刊行の第一次「時間」や一九三二年刊行の「麵麴」でもその課題は引き継がれていた。また二つの源流とは異なり一九三四年には三好達治や丸山薫たちは萩原朔太郎などと「四季」を創刊して抒情詩人達を結集してその可能性を追求していく。



三つ目は、戦後、映画評論家でもあった北川冬彦が戦後に同じ映画評論家であった飯島正と共に「長篇叙事詩運動（シネ・ポエム）」を構想し実践したらしいが、この運動について芳賀さんは資料不足で詳しく紹介していない。

四つ目に、一九五〇年に第二次「時間」を創刊し現代詩の二大潮流であったフォルマリズム（形式主義）やシュルレアリスムのモダニズム詩と社会的・政治的な内容が中心のプロレタリア詩の双方を統合して、詩の社会性と芸術性を包み込んだ「新現実主義（ネオ・リアリズム）運動」を展開しようとした。

北川冬彦は一九〇〇年に滋賀県大津市に生まれ、一九〇七年に満鉄技師の父と一緒に満州にわたり、一九一九年に帰国し三高に入學し「青空」という文芸誌に参加し、飯島正や小説家になる梶井基次郎などがいた。そして時代に先駆けた詩と詩論を掲げて詩運動を行い、十七冊の詩集を刊行した。また「詩と詩論」などで散文詩運動を生み出したフランスのマックス・ジャコブの詩と詩論の翻訳などや数多くのエッセイ・論考も残して一九九〇年に亡くなった。芳賀さんは「現代詩のオーソドックスの樹立」を目指して生涯を捧げた詩人の志の高さを伝えてくれる。現代詩の原点に北川冬彦の詩と詩論を位置づけることは、今も詩の芸術性と社会性の双方に切り裂かれている現代詩の問題点を克

夢、あるいは溢れるイマージュを書きとめることだ」といい、ブルトン達が多くの人々に与えた創造行為の新たな可能性を芳賀さんは評価している。しかし芳賀さんは、意識それ自体の「志向性」（フッサール現象学の基本概念）を断念すべしとなるか、とブルトンの試みを根源的に問うている。臨床家であるフロイトの著書を読めば明らかであろうに、ブルトンたち詩人のシュルレアリスムに全く興味を示さず冷淡だった。心を病む人びとを救いたいと考えているフロイトにとってブルトン達のやっていることは、きっと道楽息子の暇つぶしのように思えたのだろう。芳賀さんは「フロイトは意識と無意識の通路を崩さない」ことから、シュルレアリスムの「自動記述」の不可能性を指摘しているように思える。またフロイトの精神分析が、分析心理学（ユング）、個人心理学（アドラー）などに展開したことを伝える。さらに『夢判断』との関係で『圧縮』は暗喩に、『移動』を換喩に比したのは、ソシュール言語学との関連においてフロイトを捉えたパリ・フロイト派のジャック・ラカンとその一統である」と現代の修辭的感性を読み解いていく言語学への影響も指摘している。

一章はその後、「声の間こえる詩声の間こえない詩」では、戦後詩がモダニズムの問題を自らのこととして直視しなかったことを論じている。「社会派の詩的言語につい

服できる方法論と詩的精神を見据えていくきっかけとなるに違いない。

3

一章のその他の論考の「詩的言語の位相」では、西脇順三郎、中野重治、北川冬彦、山村暮鳥などの詩を分析し日本の詩人の詩的言語に影響を与えた海外の思想・芸術などの関係を探し、その位相を明らかにしようとする。

「詩的現実性の二、三の意味——リアリズムの内と外と」では、イギリスの主知的性格やイマジズム、フランスの象徴主義、キュービズム、ダダイズム、シュルレアリスム、ドイツ表現主義、イタリアの未来派などのヨーロッパのモダニズム詩運動の歴史を素描している。さらにそれに影響された日本のモダニズム詩が、戦前の北川冬彦の詩や戦後の吉岡実の詩、ハンセン病の桜井哲夫の詩が、「新たな現実」を生み出そうと現実と格闘していく試みを論じている。「フロイトとシュルレアリスム」では、フロイトの精神分析の基本的な考え方である「無意識エネルギーの体系化」を紹介し、アンドレ・ブルトンがフロイトの精神分析を詩に応用した時の問題点を多面的に検証し論じている。「シュルレアリスムの『自動記述』とは、人為的あるいは意志的に、睡眠状態に自らを置き、無意識から流出する

て」では、「発見的認識の造形」に力点を置いた修辭学の佐藤信夫を紹介しながら、「詩・現実」の北川冬彦や「列島」などの社会派の詩的言語に分け入っている。「詩の今」では、「詩の美的価値に現実を仮構して、作品の現実化を図る詩人」である安西均や吉岡実たちの詩の魅力を伝えている。「戦後詩とアメリカナイゼーション」では、「戦争の自覚を存在者の自覚として身体に刻み込まなければならなかった時代の詩」としての戦後詩が、アメリカのグローバリゼーションといかに対峙してきたかを北川冬彦、清岡卓行、白石かず子の詩を通して論じている。「二十世紀のメディア社会における詩のあり方」では、音声言語と文字言語の関係をメディア論のマーシャル・マクルーハンを紹介し、現在のインターネットと詩語の関係にまで視野を広げている。一章の最後の『講演』宗左近の詩的精神と縄文の精神性」では、今も芳賀さんと一緒に続けている鳴海英吉研究会で講演されたものだ。宗左近さんは二〇〇三年春に開催した『鳴海英吉全詩集』出版記念会で講演してくれたが、二〇〇六年に帰らぬ人となった。その年の秋に開かれた研究会で芳賀さんが宗左近さんを偲んで話されたものだ。私はこの講演を直接聴いたこともあり、その原稿も目を通して芳賀さんが、なぜ宗左近さんが縄文の精神に捉われていったのかについて、これほど肉薄して

いる宗左近論を論じてくれたことに深い感銘を受けたものだ。岡本太郎や宗左近さん達が再発見した縄文精神の中には、シュルレアリストのようなアヴァンギャルドの精神と宇宙的であり、鎮魂の思いに満ちた精神が豊かに息づいていることを私たちに伝えてくれている。

芳賀さんの詩論の特長は、根底に「新現実主義（ネオ・リアリズム）」の詩的精神の解明やその詩運動の展開を紹介することに主眼を置きながらも、二十世紀・二十一世紀の思想・哲学・芸術の多様な実相の歴史を踏まえて、詩人たちの試みを浮き彫りにしていくことだ。その意味では歴史を通して現在・未来社会の内面の在りかを探求していく詩的言語を分析する詩論ともいえる。

II章「詩人論・追悼文・書評」十三編は、草野心平の弟である草野天平、鳴海英吉、斎藤忠、早川琢、田邊辰俊、石村柳三、和田文雄、大河原巖、今駒泰成、原田道子、田中真由美、遠藤恒吉、吉野令子たちの固有の言葉の響きや発語のテーマに耳を済ませ、混沌とした歴史的現実の中から聞き取ろうとし、その詩人たちの存在の在りかを私たちに伝えてくれている。

III章の「論考・エッセイ」八編は、短いエッセイ的な論考が中心だ。例えば「現代神話」の課題など自己課題だけでなく、「詩作の多様性」を押し広げるような入沢康夫さ

んなどの詩人や復本一郎さんなどの俳人達の論考を紹介し、その論考の中に我が身も参入させてしまい対話を始めるのだ。その参入の仕方が批評することの豊かさにつながっていくような思いに至らせてくれる。

最後のIV章は、『鮫の座』論考』三十六編は、〈ダイアローグの姿勢〉——「鮫」創刊号 一九七九年・冬〉から始まっている。芳賀さんは詩誌名に借りた金子光晴の詩集『鮫』という言葉を選んだ理由を語りながら、金子光晴という「したたかな詩人の重み」をこれから同人たちと共有しようとしていく。そして物質文化がもたらした戦争、自殺、疎外と言った現代社会の病を直視しながら「私たちは、あらゆる機会に、生の証明としてのあらゆる死の全貌をとり戻すこと、それがまた共通の課題といえよう」と締め括っている。この三十六編は、現代社会と対話する思索の宝庫のような論考であり、二〇〇五年一〇一号『不条理』の美学』まで筆力は続いている。その冷徹とも言えるしたたかなリアリズムの精神こそが、芳賀さんの文体を生み出す魅力なのであり、文体に存在する思索する時間の流れや他者を発見する愉悅のような瞬間から多くのものをいつの間にか学んでいるのだ。この批評精神に満ちた詩論集を詩人だけでなく、多くの文学者、編集者、歴史研究者、思索を続けている人びとに読んで欲しいと願っている。